

# 昭和文学全集



31

---

澁澤龍彦

---

中井英夫

---

中野孝次

---

三木卓

---

色川武大

---

田中小実昌

---

金井美恵子

---

三田誠広

---

青野聰

---

立松和平

---

# 昭和 文学 全集

31

---

澁澤龍彦

---

中井英夫

---

中野孝次

---

三木卓

---

色川武大

---

田中小実昌

---

金井美恵子

---

三田誠広

---

青野聰

---

立松和平

---

# 昭和文学全集

第31巻

昭和六三年十二月一日 初版第一刷発行

著者——澁澤龍彦 中井英夫 中野孝次 三木卓

色川武大 田中小実昌 金井美恵子 三田誠広

青野聰 立松和平 村上龍

発行者——相賀徹夫

発行所——小学館

一〇〇一〇一 東京都千代田区二ツ橋一丁目三番一号

振替 東京八〇一〇〇番

電話 編集・〇二一三三〇 五二二二六

業務・〇二一三三〇一五二二三

販売・〇三二二三〇一五七三九

印刷——凸版印刷株式会社

製本——凸版印刷株式会社

若林製本工場

用紙——三菱製紙株式会社

著者検印は省略いたしました

定価 - 4,000円

Printed in Japan ISBN4 09 568031 8

© RYUKO SHIBUSAWA HIDEO NAKAI

KOJI NAKANO TAKU MIKI TAKEHIRO IROKAWA

KOMIMASA TANAKA MIEKO KANAI MASAHIRO MITA

SO AONO WAHEI TATEMATSU RYU MURAKAMI 1988

\*造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。\*本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小村あて許諾を求めてください。

目次

澁澤龍彦

5

唐草物語  
より

7  
鳥と少女

15  
空飛ぶ大納言

23  
火山に死す

31  
女体消滅

39  
三つの髑髏

47  
金色堂異聞

ねむり姫  
より

56  
ねむり姫

72  
狐媚記

84  
ぼろんじ

97  
時間のパラボックスについて

105  
サド侯爵 その生涯の最後の恋

中井英夫  
113

115  
黒鳥譚

135  
青髯公の城

167  
公園にて

173  
夕映少年

175  
月光の箱

177  
麤皮

中野孝次  
187

189  
麦熟るる日に

226  
ブリュールへの旅  
より

三木卓 271

273 巢のなかで

306 鴉

326 胡桃

334 夏

色川武大 361

怪しい来客簿 より

363 空襲のあと

368 サバ折り文ちゃん

375 門の前の青春

381 名なしのごんべい

387 とんがれ とんがり とんがる

393 墓

400 また、電話する

407 百

416 遠景

431 雀

田中小実昌 439

441 ミミのこと

461 ポロポロ

471 北川はぼくに

482 魚撃ち

493 大尾のこと

504 カント節

517 夏の日 シェード

金井美恵子 525

527 自然の子供

558 兎

567 空気男のはなし

572 桃の園

578 調理場芝居

584 月

589 水鏡

三田誠広 595

597 僕って何

656 道

青野聡 683

685 愚者の夜

737 月怒る水に溶けた便り

756 滑車の便り山上に落つ

立松和平 767

769 火の車

820 酔いどれ草

832 お蚕さま

839 雨

846 馬鹿囃子

村上龍 855

857 限りなく透明に近いブルー

911 ニューヨーク・シティ・馬拉ソン

922 ローマの詐欺師

9 2 9 作家アルバム

解説

9 3 7 澁澤龍彦……種村季弘

9 4 1 中井英夫……出口裕弘

9 4 5 中野孝次……宮内豊

9 4 9 三木卓……辻章

9 5 3 色川武大……川村二郎

9 5 7 田中小実昌……池内紀

9 6 1 金井美恵子……桂秀実

9 6 5 三田誠広……菊田均

9 6 9 青野聰……加藤典洋

9 7 3 立松和平……鈴木貞美

9 7 7 村上龍……三浦雅士

年譜

9 8 1 澁澤龍彦……編集部編

9 8 5 中井英夫……田中敏郎

9 8 9 中野孝次……中野孝次

9 9 3 三木卓……三木卓

9 9 7 色川武大……色川武大

1 0 0 1 田中小実昌……関井光男

1 0 0 5 金井美恵子……武藤康史

1 0 0 9 三田誠広……菊田均

1 0 1 3 青野聰……加藤典洋

1 0 1 7 立松和平……斎藤裕美子

1 0 2 1 村上龍……村上龍

1 0 2 6 底本について

1 0 2 9 用字用語について

澁澤龍彦







## 唐草物語 より

### 鳥と少女

ペルツィ邸の円天井の四隅に、地水火風の四元素をあらわす四つの象徴動物として、地にはもぐら、水には魚、火には火蜥蜴、風にはカメレオンを描くことを求められたとき、どう勘違いしたものか、パオロ・ウッチエロはカメレオンのかわりに駱駝を描いてしまった。ヴァザーリも伝えているように、これは当時、フィレンツェで評判になった珍無類なハプニングである。「あきれた画家もあつたものじゃ。教養がないにもほどがあるわい」と苦々しく吐きするようになるものもあれば、また一方、「いや、あいつは皮肉屋

なのさ。カメレオンテとカメロ（駱駝）とを、知っていないながら、わざと間違えて描いたものとみえる。とんだ語呂合わせ」などと、したりげに説をなすものもあつて、この事件はひとしきりフィレンツェ雀の話題を活気あらしめるのに役立ったようであつた。いつのころから定まったのか、おそらくこの動物誌あたりが古い典拠でもあろう、この四元素の象徴動物というのは、考えてみるとずいぶん奇態なものである。地にもぐら、水に魚、火に火蜥蜴というぐらいなら、まあ素人にもすんなり理解しうるとしても、風の元素にカメレオンを配するとなると、その方面の知識に明るくないものには、もうなんのこともやらさっぱり分らなくなる。そもそも風とカメレオンと、なんの関係があるのだろうか。ただ、たとえばダンテの先生として知ら

れるブルネット・ラティエーニの、当時ひろく読まれていたとおぼしい『小宝典』なんぞに、「カメレオンは誇り高き性質の動物である。なぜならば、彼は地上の何物をも飲み食いせず、もっぱら空気（つまり風）のみを吸って生きていくからだ」という記述があるのを知るにおよんで、初めてなるほど疑問が氷解するであろう。一事が万事、シンボリズムとはそうしたもののなのである。ばかばかしいような非科学的な話であるが、これだけはどうにも仕方がない。

たしかに南スペインをのぞいて、ヨーロッパには一般にカメレオンは棲息しないから、終始イタリアを離れなかつたパオロ・ウッチエロが、この小さな爬虫類を一度も見たことがなかったというのは本当であるかもしれない。しかし、いかに彼が教養のない画家であつたにせよ、アリストテレスやプリニウスの昔から、ちゃんと書物に書かれてヨーロッパの知識の帳簿に登録されていた、この蜥蜴の親類のような乾いた小動物のすがたを、彼がまったく知らなかつたとはちょっと信じられないであろう。これは教養というよりも常識の問題である。とすると、やはり彼は当時の噂のように、知つていながら、わざと間違えて描くという語呂合わせの冗談、あるいはいたずらにふけたのもあろうか。

信じがたいほど貧乏な暮らしをしていたらしいパオロの家には、部屋の壁という壁に、いろいろな種類の鳥や獣を描いた絵がおびただしく並べてあったという。彼がフィレンツェのひとびとからウッチェロ（イタリア語で鳥の意）という渾名で呼ばれていたのも、この鳥好きのためだったのである。このパオロの鳥の絵は今日に伝わらないから、それがどれほどの出来ばえであったかについては何とも断言いたしかねる。ただ、伝記作者の主張するように、彼が本物の生きものを飼うだけの金銭的な余裕がなかったために、やむをえず本物の似すがたで我慢していたのだとは、私にはとても考えられない。奇矯な意見かもしれないが、パオロにとつてはむしろ、本物よりも絵のほうがはるかに現実的な価値を有していたのではなかったか、と私は思うのだ。このことはなかなか容易には説明しにくい。いくらかニユアンスを変えて、次のようにいい直してもよいであろう。すなわち、パオロは事物から引き出された形の美しきをもっぱら愛していたのであって、事物そのものにはてんで関心がなかったのだ、と。こう考えれば、彼がカメレオンと駱駝とをつい混同してしまったという事情も、それなりに納得しやすくなるのではあるまいか。動物としての形さえおもしろければ、カメレオンであろう

うと駱駝であろうと、おそらく彼にはどうでもよかったのである。

パオロが純粋な形そのものの美しきを愛していたということは、たとえば次のようなエピソードによっても知ることができる。現在フィレンツェのウフィツィ美術館の素描版画室に残っている彼の何枚かのデッサンのなかに、奇妙な円環状の物体を描いたものがある。ちょっと見ただけではなんだか分らない。空飛ぶ円盤のように見えないこともないが、まんなかの部分がドーナツツのように抜けているから、むしろ平べったい浮き袋のような形といったほうが近いかもしれない。ただ、その円環は角ばった切子面を示しているので、ゴムの浮き袋のような感じではなく、いつてみれば硬い宝石細工かなにかのような感じがする。じつは、これはマツツォキオと呼ばれる、フィレンツェの貴族が頭に載せる木製のかぶりもので、布でふくらませた大きな帽子の骨組みになるものなのである。パオロはこのマツツォキオの形がいたく気に入ったらしく、何度となく、その精密なデッサンをこころみているのだ。

透視図法の厳密な適用によって描かれた、そのダイヤモンドのような複雑な切子面をさらした円環のデッサンを眺めていると、現在の私たちには、なんだかそれが謎の物体のよ

うに思われてくるほどだ。あの同時代人ドナテローでなくても、「パオロよ、きみの遠近法はつまらないものばかりを追って、大事なものを忘れているよ。こんなデッサンは、寄木細工をつくる職人にとつてしか意味がないんだよ」といつてみたくなるほどである。つまりは無意味なものに見えるほど、その形が精密をきわめているということであろう。

実際、先輩のドナテローもあきれたように、パオロは遠近法の研究にのめりこんでいたのであるが、それも尋常一様なめりこみ方ではなく、一般の画家が見向きもしないような、つまらない物体にまで遠近法を適用することに、そこから一つの純粋な形を引き出そうとしているかのごとくであった。

いわば遠近法を唯一の武器として、この世のありとあらゆる事物を形に還元しようというのである。馬なら馬、甲冑なら甲冑、樹木なら樹木が、遠近法を介して眺めることによつて、馬でも甲冑でも樹木でもない、ただの形になってしまふという秘密。この秘密をパオロは発見したと信じたのである。馬らしい馬を描くことをもって事足れりとしている世間

一般の画家の目には、したがって、パオロの飽くなき形の追求は不可解かつ無意味なものに見えたのだった。

「ウッチェロか。あの遠近法気違いにも困っ

たものだ。やたらに線ばかりごちゃごちゃと引っぱって、画面をなにがなんだか分らないほど錯綜さくそうさせてしまう。馬好きなのはいいが、パオロの馬ときたら、同じ側の脚を二本いっぺんに持ち上げるんだからな！」

当時、パオロとともにフィレンツェで仕事をしてきた画家や彫刻家たち、すなわちロレンツォ・ギベルティやフィリッポ・ブルネレスキやルカ・デラ・ロツビアやドナテローたちは、いずれも一家をなしたその道の名匠であっただけに、パオロの偏狭なまでの遠近法と形の追求を、敬しつつも心の底で嘖ぞわずにはいられなかった。ヴァザーリの証言で、そのことはほぼ明瞭めいりょうに知れる。

あらゆる卑俗な物質を高貴な黄金に変えることを可能ならしめる技法が錬金術だとすれば、パオロの遠近法も、この錬金術に近い技法だといえるかもしれない。なぜなら、前にも述べたように、この世のありとあらゆる事物を純粋な形に還元することを可能ならしめるのが、ほかならぬパオロの遠近法だったからである。一見、その方法は科学的でないし客観的のように見えないこともないが、そのじつ、案に相違して途方もなく観念的なのではないか、という疑いをもいだかしめるに十分だろう。いや、まぎらわしい観念的という言葉を用いるよりも、私はここで正確を期し

て、プラトン主義的という言葉を用いておきたい。現実の奥にひたすら形を求めんとするパオロの視線は、やはりなにか現実を越えた、イデアの世界を望み見ているような気がしてならないからである。

かくてパオロは錬金道士きながら、日夜、紙の上になまக்குろになるほど線や図形を描きこんだり、解決すべくもない幾何学や比例の問題に頭を悩ませたりしながら、遠近法の研究けんきゅう三昧さんまいに明かし暮らしていた。髯ひげや髪はのび放題、家のなかには埃ぼろと蜘蛛くもの巣だらけで、まさしく隠者の生活であった。めったに家から外へ出ない。ともすると寝食も忘れがちになる。後代のピエロ・ディ・コシモは画業に専念するとき、卵をいっぺんに五十個ばかり茹でて籠かごのなかに入れておき、右手で絵筆をとりながら、左手で一つずつ食っていったというが、パオロにいたっては、そもそも彼が物を食っているのを見たひとときえいなかったというから、上には上があるものである。しかし、いかに本物よりも本物の似すがた、事物よりもその形を愛する画家であったにせよ、食いのばかりは似すがたや形で代用するわけにいかぬのは当然であろう。パオロもまた、少なくとも生きていた以上、なにか知らぬが細々と食っていたことだけは間違いない。まい。

\*

これまで私はマルセル・シュウオップの名前を故意に伏せておいたが、この私の文章がヴァザーリの伝記とともに、シュウオップの『架空の伝記』からも想を得ていることは、少しく事情に通じた読者にはただちに読みとれるところであろう。もちろん、私は先人の解釈にとらわれず、自分流の勝手な解釈によって、この十五世紀のフィレンツェの画家の肖像を自分流に描き出そうと努めてはいる。

それが成功しているかどうかは、まだ私の文章が三分の一しか書かれていない現在では読者としても判定のしようがなく、以下に書き継がれるべき私の文章を読んでいただくしかあるまい。

それはともかく、シュウオップは『架空の伝記』のなかに、彼がつくり出したとおぼしいセルヴァツジャという少女を登場させている。セルヴァツジャとはイタリア語で、野蛮人あるいは野生児をあらわす語の女性形であろう。私の思うのに、これはヴァザーリがウツチェロを「野蛮人のように孤独な暮らしをしていた画家」と書いたことにヒントを得たのではないだろうか。しかしまあ、そんな詮索はどうでもよい。私は、この私の物語のなかに、セルヴァツジャをぜひ登場させたい

と思うのである。登場させることにしよう。

パオロが初めてセルヴァッジャと出遭ったのは、フィレンツェの郊外の、草に埋もれた古代建築の礎石が点々とならんでいる牧場であった。彼はここで、牧場にあそぶ羊や牛や馬、それに鳥や昆虫などを丹念にデッサンしていたのである。すなわち、これらの血肉をもった大小さまざまな動物の姿態から、例によって一つの形を引き出そうとどころみていたのだ。だから、いつのまにか自分のそばにひとりの少女が近づいてきて、描きかけのデッサン帖をのぞきこんだのにも彼は気がつかなかった。

「こんにちは。ウッチェロさん。」

「ああ、こんにちは。」

画家として少しは知られた顔だから、こちらでは知らない少女から挨拶の声をかけられたとしても、べつに不思議はなかった。しかし少女はすぐにつづけて、意外なことをい出した。

「あの、あたしをおぼえていらっしやいませんこと。」

画家は目をあげて、初めて少女をまともに見た。少女は頭に花環はなわんを巻きつけ、腰のあたりに青いリボンをしめた長い衣服を着て、はだして立っている。いかにも貧しそうな身なりであるが、その顔は屈託なく、にこにこ笑

っている。その草の茎のようなほっそりした身体では、まだ十五歳にはなっていないだろう。しかし画家には、少女の顔は一向に思い出せなかった。

「さあて、わたしはさっぱり思い出せないが、ひょっとすると、このあいだの受胎告知祭の行列の時にでも会ったかな。」

「いいえ。ちがいますわ。」

「ふむ。わしはめつたに外出しないのでな。」

女の子の知り合いはほとんどない。だが、お前さんはどちらかといえば、古いミサ典礼書の挿絵のなかにも見つけたりするような顔だよ。おぼえはないが、昔から知っているような気もする。はっは。」

思い出してもらえないので、少女はちょっと悲しそうな顔をした。その顔のわずかな変化に、たちまち画家の目が光った。頭のなかで一瞬のうちに、この少女の顔から引き出すことのできそうな、いくつかの形を思い浮かべたのである。その睫毛まげの反りかえった細かな線を、その瞳の小さな円を、その眼瞼のふくらんだ半月形を、その上唇のまんなかの三角の切れ込みを、その髪の毛の曲線の微妙なもつれ合いを、画家は鋭い目で抜き取り観察した。そして、「これは研究に値するぞ」と心のなかで考えた。

聞き出したところによると、彼女はフィレ

ンツェの染物屋の娘で、その名をセルヴァッジャといった。すでに生母をなくしており、家には継母がいて、いつも彼女を手荒く折檻せうがんしているの、もう家には帰りたくないという。パオロは話をきいて、彼女を自分の家へ連れていった。

パオロの家は赤貧洗うがときありさまだったが、それでも画家の家らしく、セルヴァッジャのいままでに一度も見たことがないような、いろいろな珍しいものが揃っていた。仕事部屋の棚の上には、動物の骨だの石だのがずらりとならんでいる。床の上には、砂時計だの天秤てんびんだのコンパスだの定規だのが乱雑にころがっている。そして壁には、ありとあらゆる鳥や獣の絵が描きならべてある。とくに目立っていたのは、くるくると尾を巻いた、獅子ししともつかずドラゴンともつかず、大蛇ともつかず鱈たつともつかぬ鱗うろこだらけの怪物が、蝶のような斑紋はんもんのある翼をはためかせ、目や口から焰ほのおを噴きあげて、銀の甲冑からぎゅうに身をかためた騎士と闘っている図であった。よく見ると、騎士はどうやら怪物のかたわらに立つひとりの少女を救おうとしているかのようである。

セルヴァッジャは無邪気な好奇心を露骨にあらわし、初めて見る画家の仕事部屋を物めずらしげにきまろきよろ眺めまわしている

うち、この騎士と怪獣の図の前にくると、やおら化石したように動かなくなつた。

「その絵が気に入つたか。これはカッパドキアの王女のお話だ。わしにも気に入りのテーマなのだよ。同じテーマで、もう三回も描いたかな。」

しかし少女は、パオロの説明の言葉も耳にはいらぬものごとく、おそろしげな怪獣に目を釘づけにしたまま、あやしく息をはずませて、

「思ひ出すわ。あれは去年の五月のことでした。先生は、あたしがもう少しで死にそうなところを助けてくださったのです。」

「なにをいう。さつきもいった通り、お前に会つたのは今日が初めてだ。」

「いいえ、ちがいます。先生は忘れていらつしやる。去年の五月、あたしはたしかに先生に助けていただいたのです。その日、あたしがロッジア・デイ・ランツイからパラッツォ・デラ・シニョーリアに通じる小路を歩いていると、道ばたの壁に剝れた壁龕のなかのブロンズの怪獣が一匹、急に乱心して暴れ出し、壁龕から飛び出して、あたしに襲いかかってきたのです。あたしは恐怖のあまり、どうしてよいか分らず、石畳の上へあたりこんでしまいました。その時でした、ちょうど通りかかった先生が、力強い腕をのばして、

あわや獣の餌食になろうとしていたあたしを、その鋭い爪からかばってくださいました。」

「……………」

「先生は獣をぐっとお睨みになりました。すると、どうでしょう、あれほど興奮していた獣がすごすごと、ふたたび壁龕のなかにもどつて行くではありませんか。そうしてふたたび、ブロンズの彫像らしく、もとの不動の姿勢に立ちかえるではありませんか。あとで考えると、おかしくって、つい笑つてしまつたのでしたわ。」

「……………」

「ねえねえ、先生、おぼえていらつしやらないの。そのとき、先生はたしか、お友達のジョヴァンニ・マネットティさんのところへ、幾何学の問題を教えてもらいに行く途中だとおっしゃっていましたわ。片手に大きな羊皮紙の巻物をかかえていらつしやいましたわ。」

そういわれてみれば、そういう事実があったのは確かなことである。パオロは親しい幾何学者マネットティのところへ、しばしばユークリッドの問題の解釈をききに行くことがあつたのだ。たぶん、去年の五月にも行ったであらう。ただ、セルヴァッジャの熱をこめて語る怪獣の一件については、いくら首をひねつても、さらに思いあたるふしがない。これ

は少女の白昼夢か、あるいは妄想のたぐいか、パオロにはとんと理解のおよばぬことだつた。

ブロンズの彫像の怪獣が、あたかも生きているかのように、その台座をはなれて動き出す。——ありえないことだが、ひるがえつて考えてみるに、これほどパオロの芸術にふさわしい現象はないともいえる。なぜなら、パオロは本物よりもその似すがたをこそ、つねづね現実的だと信じているような画家だからだ。

猫のように画家の家に居つてしまったセルヴァッジャは、ともすると一日中、鳥や獣の絵の描いてある壁の前で、じつと丸くなつてすわつていた。あたかも彼女自身、すすんで壁のなかの鳥や獣の仲間になつてしまつたかのようであつた。しかし彼女は頭のなかで、いつも一つのことを考えを集中していたのである。彼女にどうしても合点がゆかなかつたのは、自分がこれほど愛しているにもかかわらず、画家のほうで、それに気づいたそぶりさえ見せてくれないということだつた。恋をしている少女のやさしい顔を眺めるよりも、どうやら画家にとつては、紙の上の直線や曲線の錯綜を眺めているほうが楽しいらしいということだつた。そんなことがありうるだろうか。少なくとも彼女のそれまでに知っ

ていた世界では、そんなことはありえなかったのである。

とはいえ、画家は必ずしも彼女をほったらかしにしておいたわけではない。パオロは時に思い立つと、彼女に近づいたり離れたたり、彼女を立たせたり坐らせたり、あるいは彼女をはだかにしたりして、その唇や目や髪の毛や手や、その身体のあらゆる部分や姿態を熱心にデッサンするのだった。これを要するに、彼女から形を引き出すためである。

「ウッチェロ、あたしはあなたのお役に立つてるの。」

もうそのころには、彼女は画家を先生と呼ばずにウッチェロ、つまり鳥と親しく呼びかけるようになっていた。

「ああ、ずいぶん役に立ってるさ。お前のおかげで、どんなに新しい形を発見することができたか知れやしない。その形を組み合わせて、わしはもう一度、カッパドキアの王女のお話を絵にしようと思ってるくらいだ。いままでは、わしが若いころに肖像画を描いたことのある、リミニのロベルト・マラテスタ夫人エリザベッタ・ディ・モンテフェルトロの顔を使っていたんだが、あれではどうも、少し老けすぎていて、おもしろくないような気がしてきた。お前の顔のほうが、ずっといい。」

絵筆をとっているとき、パオロは上機嫌だった。セルヴァッジャはほめられて、やや頬を染めながら、思いきって、さらに語を継いだ。

「では今度、あたしの肖像を描いてくださいませんか、ウッチェロ。」

「お前の肖像。」

「はい。」

「それは駄目だな。」

「どうしてですか。」

「肖像というものを、わしはもともとあまり好かん。人間の顔は、人体のなかの一部分、さらに大きくいって自然のなかの一部分だ。わしには、それを独立させて扱おうという趣味はないな。」

「でもウッチェロ、唇や目や髪の毛は、さらに小さな一部分ではありませんか。」

「それはそうだ。これはまいった」と画家は笑って、「つまるところ、わしの考えでは、人間の顔には不純な要素が多すぎるのだよ。どうせ小さく分けるなら、唇や目や髪の毛まで徹底させるにしくはない。」

「あたしの顔も、不純なんでしょうか。」

「不純ということは、とかく顔はなにかを語りすぎる。そうだ、お前の顔を初めて見た時は、ミサ典礼書の挿絵のなかの顔のようだと思ったものだよ。」

画家がひとりの女を愛しているならば、当然、その女の肖像を描こうという気になるはずだと思っていたセルヴァッジャには、パオロの言葉は残酷にひびいた。しかしパオロには、自分の言葉が少女に残酷な効果をあたえようとは、夢にも考えられないのだった。それというのも、パオロは根っからの形の画家で、特定の女に自分の愛を局限するという喜びをついぞ知らなかったからである。パオロの喜びがあったとすれば、それはむしろ別の源泉から生じていたと考えなければならぬ。

それでは、パオロの喜びはいかなる源泉から生じていたか。それはなによりも、特定したり局限したりすることを好まない喜びだったから、宇宙のありとあらゆる事物に、均等にそそがれる愛に由来していたはずであろう。人工衛星に積まれたカメラのように、彼は地上を離れて飛翔しながら、眼下に見える場所のすべてを洩れなくキャッチしようとしていた。セルヴァッジャの唇も目も髪の毛も、こうしてキャッチされた鳥や獣の一つ一つの姿態、樹木や岩石の一つ一つの線、雲や波の一つ一つの影と、なんら異なるものではなかった。パオロはこれらすべてをまったく同等に眺め、まったく同等に愛していたのである。そういう性質の男だったのだから仕方があるまい。

そうかといつて、これはいうもおろかなことだが、画家の家で暮らしていたセルヴァアッジャが、いつも不幸だったというわけでは決してない。美術家仲間のブルネレスキやギベルティが、共同研究のためにパオロの家にやってきたりすることがあると、彼女は接待のために甲斐甲斐しく立ちはたらいだ。

「おや、ウッチェロの住居に若いホステスがあらわれた。こいつは奇妙だ。」

そんな無遠慮なからかいの言葉をかけられても、彼女はわるい気がしなかった。しばしば夜おそくまで討論している美術家たちにつき合つて、彼女も眠い目をこすりこすり、できるだけ起きていようと頑張るのだが、いつも十二時をすぎると、仕事場の壁にもたれて、そのまま朝まで寝てしまふのだった。そうして目をさますと、朝の光のなかに、つい自分の頭の上に、壁に描かれた色さまざまな鳥や獣のすがたが浮かびあがつて見える。そういう時ほど、彼女が自分をいまままでに不幸福だと感じる時はなかった。

さて、とかくするうちに、パオロの貧困はいよいよどん底状態に達しようであった。家には食べるものがな一つなくなつてしまつていた。せめて美術家仲間に相談して援助を仰げばよいものを、パオロ自身がなにもいわないものだから、セルヴァアッジャもまたな

にもいわなかつたらしい。そしてなにもいわないままに、彼女は飢えて死んだのである。小さなセルヴァアッジャの魂に救いあれ。

セルヴァアッジャが死ぬと、その屍体を眺めて、画家の目が異様に輝き出したのは当然の仕儀だつたらう。真新しい少女の屍体というもの、彼は初めて見たのである。なにはともあれ、これを紙の上に写し取つておかねばならぬ。彼にとつて、それはほとんど画家たるものの神聖な義務に似ていた。彼は少女の身体の硬直の具合を、合掌した小さな瘦せ細つた手を、あわれな目の閉じられた線を、十五歳になつてもまだふくらみきらない未熟な乳房を、へこんだ腹を、貝殻のような貧相なセックスを、それぞれ写し取つた。彼女がすでに死んでいるということを、この画家はまるで意識していないかのようにあつた。

しかし一説によると、セルヴァアッジャが息を引きとつた日の夜、パオロはどこからか工面してきたらしい堅くなつたパンのかけらを、はや死後硬直のはじまつている少女の口のなかに無理に押しこもつと苦心しながら、うつけたような顔で泣いていたという。いくら世間知らずの画家であつたとはいへ、人間の死ということを彼が知らなかつたはずはなからうとも思う。これは私の意見である。

ちよつと話題を変えることをお許しいただきたい。

もう五年ばかり前のことになるが、私は二カ月におよぶイタリア滞在中、あるとき、車でサレルノ湾に沿つてソレント半島を一周し、さらにナポリ湾の海岸づたいにポツツォーリまで来て、そこからフェリーボートでイスキア島へ渡つたことがあつた。

マイオーリ、アマルフィ、ラヴェッロ、ポジターノ。ソレント半島の南側に点在する觀光地の町の名前は、美しい母音のひびきにみちいて、それだけでなにかこう、私たちの心を甘くつつみこもうとするかのようにである。絵葉書的といつてしまえばそれまでだが、このあたりの海岸沿いの岩山の中腹には、ブーゲンヴィリアの紫色の花のほか、いろいろな種類の色どりあざやかな花々が咲きみだれていて、目を樂しませることかぎりなく、さすがにローマ以来の景勝地の名に恥じないな、という気がする。ナポリ湾を挟んでソレント半島の反対側にあるイスキア島は、カプリ島ほど有名ではないが、私がぜひいっぺん行ってみたいと考へていた島だつた。ここには、あのヴィットーリア・コロンナの住んだ城もあるのだ。



ポツォーリの船着場から自動車ごと乗りこんだフェリーは、べつになんの変哲もない、日本にもよくあるようなフェリーだった。島までは四十五分を要するという。船が走り出すと、私はしばらく上甲板に立って風に吹かれながら、遠ざかってゆくイタリア本土をぼんやり眺めていたが、やがて風が冷たくなってきたので、妻を促して下の船室にひっこむことにした。船室は、粗末な木のベンチをならべただけのものである。客の数は多くない。その少ない客のなかに、イタリア人の母と娘の二人連れがいた。

第二次大戦直後のイタリアン・リアリズムの映画によく出てきたような、一つの理想をもって生活の苦勞に堪えているといった感じの、質素な身なりをした若い母親である。いかつい顔だが、それなりに美しい。いや、美しさに客観的規準があるわけではないから、そのとき私が彼女の表情を美しいと思ったのである。娘のほうは十歳ぐらいだろうか、色が白くというよりも薄いという感じで、いかにも腺病質を思わせる。日本人がめずらしいらしく、さきほどから、この女の子がしきりにちらちら私たち夫婦のほうに目をやるのを、母親が小声でたしなめているのが、こちらにも気配で察しられる。

私はそのとき、朝からやや二日酔い気味だ

だったので、ポストンバッグをあけて、日本から持ってきた粉菓をとり出し、妻が苦心して見つけてきてくれた水とともに菓を飲んだ。その私の菓を飲む動作のいさよひじょう一伍一什も、イタリア人の女の子にじっと見られていたのだった。

私が飲んだあとの菓の包み紙で、退屈まぎれに妻が折り紙をはじめると、女の子の好奇の目はさらに一段と輝きをました。いったいなにをやっているのか、彼女にはまるで想像もつかなかったのであろう。

やがて小さな紙の鶴ができた。私はそれを妻の手から受けとると、立ちあがって女の子の前行き、だまって彼女に渡した。

女の子は最初びっくりしたらしく、かたい表情で私の顔と鶴とを等分に見ていたが、ふと、それがなにをあらわしているかに気がついた様子で、みるみる満面に笑みをたたえたと、はずんだ声で、

「ウッチェロ！」と叫んだ。

ああ、ウッチェロとは鳥のことだったんだな、と私はあらためて思った。そして、なぜだか分らぬ感動に胸が打ちふるえるのをおぼえたのである。

もしこの紙の鶴が、あのフィレンツェの彫像の怪獣のように、生命を得て動き出し、女の子の手から飛び立って、ひらひらと空中を

舞い出したならば、話をもっとおもしろかったはずであろうが、そういう奇蹟は残念ながら起りうべくもなかった。しかし起らなかったとしても、私には十分に満足だった。